

困った病名

言葉には長い間かけておのずと備わった語法がある。多くの人々は感覚的にそれを身につけているので、語法にかなわぬ言葉遣いには瞬時に違和感を感じる。乱雑な言葉遣いをしているところの感覚は身につかない。理屈で違和感を説明しても感覚ではないので乱雑さはあらたまらない。こうして言葉の質高い意味と複雑さが失われ、考え自体も平板な低いものとなってゆく。

病名に“〇〇症”と“△△病”がある。〇〇は、高血圧症・低酸素血症・統合失調症のように異常なもの（〇〇という異常がある）を指しているようだ。いっぽう△△は肝臓病・心臓病・生活習慣病のように、異常となったもの（△△の異常である）を指していて、異常自体ではないようだ。
認知症（痴呆症 = dementia）；

わが子を認知する・現状を認知する。認知は認め知ること、の意である。高次「機能」の一種である。高次機能は他に言語・思考・・・生物「機能」を並べると、月経・便通・・・もう少し特殊な機能となると、甲状腺機能・触覚・・・。

さて「認知」に他の機能を代入してみよう。すると、言語症・思考症・月経症・便通症、さらに甲状腺機能症・触覚症になる。ナンセンスは一目瞭然。月経症では無月経も過多月経も、便通症では下痢も便秘も区別されていない。甲状腺機能症も臨床的に無意味。甲状腺機能病に亢進症と低下症がある、というなら自然な感覚にも適っている。

痴（知が床に）呆・失語があるとはいっても認知・言語があるとはいわない（昨今、介護看護婦はおろか教養あるべき（無いのだが）医師の中でも、この患者に認知がある、と言っているものが出てきた！）。いうなら認知・言語の異常がある、という。いつのまにか、認知 = ボケという、日本人全部が認知症のとんでもない事態がおとずれそうだ。痴呆症でよいのである。せめても認知機能障害症・認知機能廃絶症でなければならない。

慢性腎臓病 = chronic kidney disease；

生理機能状態名（慢性腎不全）でも病理形態疾患名（慢性腎炎・糖尿病性腎症 etc）でもない。腎臓が悪くなってしまっている、とだけいつている。医学を知らない一般の人に簡単に正しく事態を伝える一般語であって、医師同士でこれを喜んで使うほどに医師は退化してはならない。蛇足ながら、腎臓病といって腎臓症といわないのがせめてものこと。

脂質異常症；

「脂質」に他のものを代入すると、病名としての名称の滑稽さが良く判る。「糖質」異常症・「蛋白質」異常症。「糖質」異常症では無意味であって高血糖症・低血糖症でなければ意味がない。高脂血症・低脂血症・異脂血症を区別しない無意味さは一瞬で判る。包括的に脂質代謝が異常というだけでは、慢性腎臓病と同じで臨床上意味がない。蛇足ながら、脂質症といわず脂質異常症と言葉感覚は正しい。病気としてあるのは脂質ではなく脂質異常だから、身についた言葉感覚が無意識に表出したのだろう。